

# 「和光—魯迅日中友好子ども版画展」の 歴史的意味を探る

江渡英之

## —要旨

2013年8月上海で、続いて10月に東京で行われた標記展覧会実現への日中両国関係研究者の交流を紹介する。

2010年3月北京魯迅博物館訪問で収蔵児童作品を実見しその経緯をまとめた前論文（『表現学部紀要 11』）のその後の研究結果について論述する。

1934年、魯迅に創立時の和光小学校児童版画が贈られるに至る中国版画運動の歴史的背景を探る。魯迅と内山嘉吉の交流で目指した木版画の教育的役割とその表現性について今日の視点から考察する。

現代の日本と中国の児童版画を紹介し、その特徴を見る。この文化教育交流が日中関係の中で、いかに意義のあることであるかを論述する。

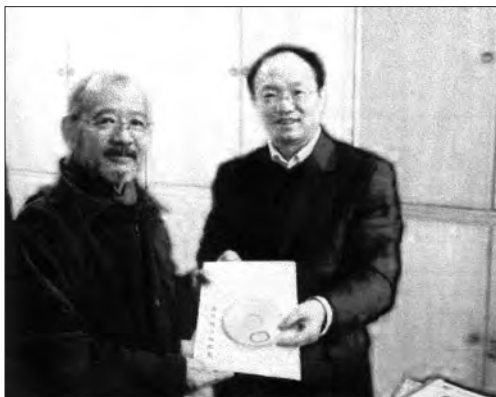
## 1. はじめに

2013年8月と10月に中国と日本で〈和光—魯迅日中友好子ども版画展〉が開催された。これは上海魯迅記念館と和光学園の共同開催という国際的なものである。

この実現は、直接的には2010年3月の私と石山晃（学園事務局長）の北京魯迅博物館訪問が契機となったのだが、日中双方の想いと多くの方々のご厚意と協力があったことだ。

現地では和光学園同窓会西尾栄男会長の北京事業所の中国人通訳劉シャンプイオンに車での案内と接待をいただいた。

北京では中野光和光大学元教授の友人である北京大学教授彭家声、張光珮ご夫妻にお世話になった。会食で同席した北京大学教授商金林が魯迅博物館に連絡し、和光小児童版画を実見する機会を得ることができた。75年



黄喬生副館長より画像CDをいただく

前の和光小児童版画を地下収蔵庫で見て、さらに画像 CD をいただくことができた。

この魯迅博物館訪問の際には、持参した和光中学校生徒、和光鶴川小学校児童の版画およそ 40 点を寄贈した。75 年ぶりに和光学園生徒の作品を加えることになった。

この北京訪問の動機は、私が大学で美術科教育法を教えている、昭和初期の児童版画が良い状態でまともに残されていることは美術教育史上の新事実として記されなければならないという美術教育研究者としての使命を感じてのことだ。

従って、これは全く自発的な旅行であり、同行した石山晃とは企画段階から相談し、平等に役割分担協力しあい事前に関係者にもお会いし準備した。渡航滞在謝礼経費等全て自費で賄い、できたことであった。そして、その画像 CD は帰国して和光学園に寄贈した。

北京訪問とその意義に関して『和光大学表現学部紀要 11』に拙文を掲載したので参照されたい。この文章展開上、その時のものと若干重なる部分も含まれることを勘弁していただきたい。

ここで 3 年半の経過とその間の思索をたどり、今回展覧会の歴史的な意味を探ることを目的とした論述を行う。

## 2. 1934 年、魯迅に児童版画が贈られる

1934 年 7 月 20 日、魯迅は内山嘉吉からの児童木版画 43 点を受け取る。魯迅は大変喜び彼に礼状と復刻した明朝期信箋を送った。そのことは『ある私立学校の足跡—和光学園四〇年の教育』に記載されている。ここで紹介されている魯迅の次の文言は作品を創作した子どもたちへの深い親愛を表し印象深いものだ。

「今日は少しばかり信箋を同封します。これは明朝末期、すなわち 300 年前の木版画の複製、どれほどの用途があるかわかりませんが、おもちゃと見なして、小さな芸術家におのおのお分けください」と記す。

送られた和光小学生の版画を見て、「小さな芸術家」と呼ぶほどの感銘を魯迅は受けたから出てきた言葉であった。もちろん、彼が復刻した信箋はおもちゃなど、とは言えない価値を持ったものであった。

1927 年に広州から上海に来た魯迅は、版画表現に注目するようになった。その理由は中国民衆を覚醒させる有効な方法としての版画の複製性や明確な表現性にあった。

彼は 19 世紀ヨーロッパで発展した創作版画の先駆的作家の紹介を進める一方、中国で生まれた木版画の優れた技術が明朝期の文人たちに愛された透かしの版画入り便箋にあることを見出した。彼はまず『北平箋譜』の復刻を行った。300 年前の原版を捜し、更に扱える職人を見出すための大変な事業であった。さらに『十竹斎箋譜』を手がけていた。この刷り版を送った。おもちゃと言えるようなものではなく価値の高い芸術品であった。

2011 年 9 月『上海魯迅研究 2011 年秋』誌で楽融は「信箋で彼らを小芸術家と呼んで、あますことなく魯迅先生のこれらの版画の小作者に対する賞賛と期待を伝えていたことが

わかる」と述べている。

魯迅が児童版画を受け取ったのは1933年3月に成城学園の作品以来2回目であった。成城学園生徒林信太の版画とは魯迅日記の記述だ。この時は1点とあり、和光児童版画43点、あわせても魯迅博物館収蔵版画49点に及ばない。

それにしても2回の贈呈数より多くの子どもの版画を魯迅は保管していたのだが、この分析がもっとできないかとも考えている。

魯迅は1936年に亡くなるまでこれらの版画を大切に扱い、彼の中国木版画運動で参考資料として利用していた。このことは魯迅博物館夏暁静研究員との話で私は慎重に確認したことだ。

1941年、上海は日本軍の支配下にはいった。そのときに、日本軍憲兵隊は魯迅の家を襲い伴侶であった許広平を逮捕し、魯迅の遺品を押収した。抗日闘争関係者を探ることが目的であったという。許広平の釈放のために身の危険を顧みず奔走したのは嘉吉の兄完造であった。しかし押収された遺品は返還されることなく魯迅の貴重な資料は喪失された。こまめにつけていた魯迅の日記に欠損があることを後世の研究者は惜しんだ。

しかし、全てが失われたわけではなく、魯迅を支援した人々によって守られた。それらが北京博物館や上海記念館等に残されている。その一つが日本の子どもの木版画であった。そのような経過から見ても、魯迅を国家的偉人とする政府によって、児童版画を国家第一級文化財とする理由がよく理解できることだ。

それにしても、今日、昭和初期の日本の小学生木版画が中国で良い状態で多数残されたことが、日本軍強奪を逃がれての成果であるとは歴史的皮肉と言わざるを得ない。

以上述べたように、日本の児童木版画が私たちの考える以上に価値のあるものとして魯迅が考えていたから残されたということなのだ。

何故魯迅は日本児童版画に価値を見出したのか、その経緯を考察していく。

### 3. 魯迅はなぜ版画講習会を行ったのか

魯迅は半植民地状態の中国が民族的自尊心を回復し、独立を達成するために行動した。日本留学で目指した医学の道は途中で文学へと変更した。留学中に日露戦争が勃発、その報道映画を見ていたとき、スパイとして中国人が処刑される場面に喝采する同胞の姿を見て愕然とした。日本の空気は「一等国になった」とアジアの盟主気取りで盛り上がっていた。中国人、朝鮮人等への差別も強まった。そのため学んでいた仙台医学専門学校をやめて、文学者となって中国民衆を覚醒させる道を選んだ。医学は人を救うが一人だけだ。文学は言葉を使って多くの人々に影響をあたえることができる。そのような思いをもって中国に帰った。

魯迅は文学とともに芸術がいかにか人間の成長にとって必須なことであることを認識していた。1912年に彼は辛亥革命によって成立した中華民国の教育官吏になった。早速行った

のは芸術教育を進めるための提言であった。しかしそれはあまりに時代の先をいくもので支持は少なく、かつ中華民国自体も袁世凱の独裁で押し潰された。その後には彼は「阿Q正伝」や「狂人日記」等を発表し文学者として名声を得る。北京女子師範大学で教鞭をとるが、大学改革をめぐり軍閥政府に追及され広州に逃れた。上海に来た1927年は前年に蒋介石のクーデターで左翼勢力弾圧が行われた。1931年2月には親しい柔石ら多くの作家が秘密処刑されるという事件が起きた。

魯迅は新たな民族解放闘争への方策を探った。中国が世界を変えた三大発明の一つ、版画に注目した。火薬、羅針盤、印刷技術がそれだが、中国隋王朝期に版画は西洋に伝播した。その後、明朝期に版画として盛期を迎えたが、その後は技巧的な工芸の領域となっていた。

19世紀にヨーロッパでは創作版画が発達した。英国のピアズリー、日本では落谷虹児にも注目、とりわけドイツの女性版画家ケータ・コルヴィッツやソ連の作家を複製し紹介に努めた。

魯迅出版の創作木版画集に共鳴し、動きだしたのは中国の若き画学生たちであった。

上海では芸術専門学校学生たちを中心に一八芸社〔民国18年を意味する〕が木版画をすすめるために結成された。彼らは創作版画を制作するために、出版された画集を模倣した。その作品が出来た詳細は分からないので、想像で色々工夫した。彫刻刀は特に入手困難であった。大工が使うコマスキが丸彫刻刀として利用された。

初期中国木版画を見ると、この版画用の彫刻刀の不足を見る必要がある。講習会后にこの問題を解決したのも、嘉吉の兄内山完造であった。彼は上海内山書店で日本の彫刻刀セットを輸入し廉価で販売した。

中国版画の発展はめざましいものがあったが、この彫刻刀の普及がどれだけのものではあったのか。それはわからないが版画運動に役立ったことはまちがいない。

中国は墨の本場なので問題ないが、紙はどうしたのか。中国で広く使われているのは漉いて作られた宣紙という紙だ。今日でも売られているが、薄すぎて版画の多色摺りには向いていない。

内山の上海内山書店訪問は1929年が最初で、魯迅を紹介された年だ。成城学園教師であったので、夏休みを利用した8月であった。店主の内山完造は多くの中国人を助けているが、国民党官憲に追及されている魯迅もその一人だ。

内山が15歳年長の兄に呼ばれて上海内山書店を訪ねたのは何故か。その後の経緯を見ると、完造が東京に内山書店日本店をつくるためであることがわかる。1931年の訪問では完造の書店員であった片山松藻と結婚し、魯迅も招いての披露宴を行っている。1935年には東京世田谷区で松藻の経営で書店を開いている。1937年に神田に店を構えるにあたり、嘉吉は片手間ではなく、和光学園をやめて書店経営に専念することになった。

1931年の出来事について内山は『魯迅と木刻』で詳しく語っていて、これは前論文で紹介した。だが『上海魯迅研究 2011年秋』の楽融論文が述べていることには新事実が含

まれていた。

1931年夏、内山嘉吉は上海に新婚旅行に行った。ある日、魯迅は内山書店に行って、内山嘉吉が一枚の木版にマッチ箱の図案を彫っているのを見て、思わず目を輝かせた。そもそも内山嘉吉は美術教師で、上海に来て丁度付近の日本人が開いた北部小学校で短期版画訓練指導を指導していた。彼を迎えて版画基礎訓練班の教師になって貰えたらいいだろう、そう考えて魯迅は北部小学校短期版画訓練班に出向き、内山嘉吉の授業を参観した。魯迅は満足しその場で嘉吉に木刻講習所の教師を担当してほしいと要請した。内山嘉吉は何度も断ったが、魯迅の粘り強さに負け、招請を受け入れた。

内山自身が語っているより、この話は自然だ。魯迅がいかに慎重に人を選んだかがわかる。

#### 4. 版画講習会の成果

1931年8月13日、内山は講習会準備のために魯迅のアパートを訪問、そこでひと重ね30cmもある版画作品を見せてもらい説明を受けている。魯迅は講習会当日もこれをもとに版画について画学生に語っている。

魯迅が親交のあったケーテ・コルヴィッツを含む創作版画の実物を目の前にして内山は版画の思想を学び取ったに違いない。そのことはその後内山の指導した児童版画を見るとわかることだ。

魯迅が創作木版画に関してどのような考え方を持っていたのか。

創作版画はヨーロッパで19世紀に始まった。イギリスのピアズリーの鋭い線描の美に魯迅はひかれた。西洋を学んだ日本では1904年(明37)、山本鼎が「明星7月号」に「漁夫」を発表。創作版画運動のきっかけをつくった。「自画、自刻、自摺」がそのスローガンであった。この日本の創作版画を手本にすべきと考えていた。

魯迅は大正期版画家落谷虹児を好み、画集も出版している。日本の創作版画技術書は内山完造を通して手に入れている。

魯迅は1929年に「芸苑朝華」と題して外国木版画シリーズを出版している。1934年「木刻紀梯」を出し、これらと各地で行った講演記録や手紙などから魯迅の版画への考え方が残されている。

木版画の特徴はさまざまであるが、「力の美」という言葉に集約している。作者は題材を自由に選び、描き、筆を彫刻刀に替えて版木を彫り進める。摺りに至るまで作者の表現であることを重視した。そして精気ある芸術家と鑑賞者があって「力」の芸術が生み出されると言う。

彼は木版画の白と黒の配置が明瞭な表現性を生み出していくことにも注意を向けた。こ

れが洗練されていくためには確かな描写力が必要である。この点で英国のビアズリーやドイツのケーテ・コルヴィッツを高く評価している。日本の創作版画は技法は学べるが、趣味的傾向が強いと批判的だ。

講習会を前に内山は彫刻刀3組とバレンは用意できた。困ったのは和紙の調達で、上海市内を捜して「西の内」という和紙を手に入れた。内山は用具などに気を使った。講習会当日、画学生が持ち込んだ用品を観察し、どういうもので木版画を生み出しているのかに注目した。彫刻刀はみんな持っていた。しかしこれは新調の背広を売って買わなければならないほど高い価格だ。版木は真っ白な木目のない「ドロヤナギ」という木だ。バレンは中国にはなく、馬の尻毛を束ねたものであった。

講習会では最初に魯迅が持参の版画を示して理論的解説を行った。内山は用具の説明、扱い方などを示して具体的な技法の手ほどきを行った。

このように魯迅は実際の制作に必要な情報を内山から得ることができた。内山が持ち込んだ和紙「西の内」はその後彫刻刀、バレンとともに内山書店で扱うようになり、魯迅はこの「西の内」をヨーロッパの版画家への贈り物としてよくつかった。

そして、内山が得たものは帰国して版画指導で生かされていき、その成果としての児童版画が魯迅を感動させた。

## 5. 内山嘉吉の版画指導作品をめぐって

1931年9月18日、柳条湖事件勃発、日本の支配地域拡大への野望があらわになった。中国側にとって屈辱の日として今日まで忘れられないことになった。

帰国して間もないこの事件は、日本においては、中国軍が鉄道爆破したと伝えられ中国への反感が高まっていく。

内山は上海で学んだことを実践するには時期的に困難と感じていたに違いない。

1932年度になって、ようやく成城学園での版画指導作品ができ上がる。1933年3月に内山嘉吉は成城学園児童木版画を魯迅に贈る。魯迅日記では成城学園林信太の版画一点となっている。しかし、魯迅は謝礼に中国信箋10点を返しているの、ただ一人の1点なのか、実際はもっと多かったのではないかと『魯迅と木刻』の著者奈良和夫は指摘している。

同年4月、始業式での小原校長の突然の退任挨拶から成城学園事件が起きる。小原派と反小原派の確執は長期化し、子どもの教育を心配した親の有志により11月10日に和光学園が設立される。児童33名、教師7名の小さな、しかし、自由教育の初心に還った理想に燃える新学園がスタートした。参加した教師の一人が内山であった。

1934年4月に新校舎での授業が始められる。1学期の授業の成果として、早速7月20日に和光学園児童の版画43点が魯迅に贈られた。内山にとっては上海版画講習会で得た栄養たっぷりの作品であったにちがいない。

その初々しい児童の版画が封印され、75年のときを経て、2010年、3月16日北京魯迅

博物館地下収蔵庫で私の目の前に姿を現したのだ。作品を見たときの驚きと感動は生涯忘れることのできないものであった。思わず、感想を口に出し、独り言と周りの同意を得るような気持ちで語りながら、一枚一枚をめくって見たのだ。

ここまでの経緯を語った記事がネットに登場し、全中国に配信され、香港の新聞に掲載された。それを抜粋して紹介する。

「魯迅に贈られた日本小学生版画始末記」2012・12・30 劉波

2010年3月15日、北京魯迅博物館は一人の日本からの客を迎えた。東京和光学園美術教師江渡英之だ。旅の目的は75年前に魯迅に贈られた43枚の木版画を尋ねることであった。魯迅博物館副館長黄喬生は客人に対して、木版画画像CDを贈った。但し、実物見学の請求に対しては、地下収蔵庫へ入って見学することは断った。これらは国家第一級文化財であるから、容易に出すわけにはいかないと伝えた。

時代は遡る。1931年7月、一人の日本人美術教師内山嘉吉も中国にやってきた。魯迅の招きに応じて、彼は上海の日本語学校の一教室で木版画講習会を行った。

(途中省略)

和光学園小学生の版画が魯迅に贈られた事実は、魯迅日記に記載されている。しかしその手紙に関する内容が少ないため、それほど注意されていない。1981年に内山嘉吉と奈良和夫は『魯迅と木刻』を出版した。そこでは魯迅と内山嘉吉の信書の交換にふれているのはごくわずかで、生徒の版画が魯迅に贈られたことには全く言及されていない。この事実を記載するには、長い時間がたって、誰も知らないことになってしまったのだ。

幸いにも東京和光学園は、近年になりこの昔の出来事を掘り返して研究する努力を始めるとともに2011年に出版したのが『1934年和光小学生が魯迅に贈った木版画』だ。その本の中に北京魯迅博物館に収蔵されている49点の木版画が完全に収録されていて、そのうち38点の作品にはサインがあることが確認されている。署名者は10人、吉田玄致、青木静、田中誠之助、井上伸一郎、青山博は当時の在籍生徒名簿に記載があり、その他の小さい作者たちは不明で、おそらく別の学校の可能性が指摘されている。記載されていることで注目したいのは1988年、中国版画展が東京町田市立国際版画美術館で開催され、その中に魯迅が収蔵している日本児童木版画のコピーが含まれていたことだ。60数歳になった吉田玄致は招かれてこの展示を見て感動、自分の幼いころの作品を前にして興奮がとまらなくなり、

53年を経て再び自作に出会い、まるでテレビドラマ同様の邂逅です。……とりわけその1枚は鋤を持って畑にたっている先生です。当時校庭内には一面の麦畑があって、肥沃な黒い地面は雨後に雑草が生い茂り、先生と生徒はちょっと時間があれば草取りに追われたのです。この作品でなつかしい当時を思い起こし、内

山先生は黒い縁めがねをかけて、ゆったりと土にかかわる指導をされていて、生徒たちの創作意欲をかきたてたものです。

と言っている。

その野外で草取りし、子どもたちに舞うように自由に彫刻刀を使うように教えた美術教師の姿はすでに時間の流れにまき込まれて遠のいてしまったのだ。が、この時はまだじりじりと魯迅博物館地下収蔵庫の扉が開かれるのを待っていたのだ。もう一人の美術教師は、再び、時の経過を戻すかのように、魯迅博物館地下収蔵庫の大きな門を開くことになるのだ。

2011年3月16日、江渡英之は魯迅博物館に3回目の訪問を行う。彼の執着に感じ入った博物館責任者は特別に収蔵庫へ入り絵を見ることを許可した。江渡英之は後の回想で言っている。

夏研究員と別の博物館男性職員と私は収蔵庫で同席したのだ。目の前には75年前の和光小学校生徒の版画だ。白手袋を着け、私は一枚一枚作品を手に取り見た。作品はどのような紙をつかったのか、墨で摺ったのか、どのような彫刻刀をどのように使ったかを実物を見て確認を進めた。作品はダークブラウンの台紙に貼っていて、上面にはパラフィン紙で非常に注意深く保護されていた。私はやっとCD画面内が出した作品の大きさと実物の違いを発見した。ただ、当時は台紙の大きさが原因で気づかない作品もあった。

これら75年前の歴史的な和光小学生の作品を見て、抑制できない感動を持ちながら一枚一枚を見たのだ。「用紙は思いのほか薄いのだが、ただ何枚かは厚手なものが見られる」「これは墨で摺ったものだ」「丸刀の彫刻刀の使い方がとても良い」私たちはこのように版画を話題にして見たのだ。「箱」をテーマにした作品を見て、いつのまにかとまる手。この作品の内容は簡単であるように見えて、強い存在感がある。「本当にこの絵を家に飾りたいくらいだ」と話がとまらなかつた。マッチ箱大の作品印象がとても強かった。大きな空間が小さい画面に溶かし込められ、作品の真実のサイズがなんであるかを忘れさせるのだ。

これら作品の全体的雰囲気は現代的で75年前とは考えつかなくなる。例えば、果実類を描写する作品であっても、描かれたものはバナナ、さくらんぼ、枇杷など現在でも魅力的なのだ。作品の中の花瓶は西洋風で高貴な感じが同じようにある。子犬はハキハキと可愛らしさが生き生きと彫られている。風景作品はそんなに古臭くない。家や電信柱などモチーフが同じでも野暮ったくない。

これらの作品は例え題材は同じでも一枚ごとにそれぞれの境地がある。しかも全て幸福で平和な雰囲気をかもしだしている。これらのことから全て上等な作品である。



江渡英之は幸運であった。彼は親しく作品に触れ、自分自身の目でこの美しい絵を目撃でき、深い感銘を受けたのだから。

「当時、日本の版画教育はまだ黎明期であったので、これらの作品は初期的な、力の満ちる初々しさがある。私はとても良いと感じています。子どもたちに強制的に教え込みをするのではなく、自分を表現するための誠実さを大切にして、先生は親のような慈愛で子ども自らの成長を支えています。和光小学生の木版画からとりわけ私が学びとったのはそういうことです。」

彼の感じ方は、魯迅と相通じることだ。1933年7月18日、魯迅が木版画家の羅清禎に送った手紙の中で同じく似た話を切り出している。

私は少年が木版画を学び始めるときに、題材を十分に自由に選ぶべきだと思います。風景や静物、虫や魚、ちょっとした一枚の葉っぱを使ってと、いずれでもよく観察して技術をじっくりと高めていき、次第に大作へとすすめていくのが良いのです。木版画を手がけ始めるとすぐに功名心で成功させようとするのではなく、作品に含まれている深い意味と効果的技法をしっかりと見ることです。制作方法の勉強と絵の練習を重ねることなく、真の力量をつけていかなければ、輪郭線しかみないような希望とは相反する結果を招くしかないのです。

この話は、当時の遠く日本にいた小学生たちにも心で分かり合えたのではないだろうか。

(上記は張中嶢の協力で著者が和訳し、佐治教授が修正した。劉波は山東威海テレビ局の記者)

## 6. 日中文化交流の進展

2011年3月上梓された『和光大学表現学部紀要 11』に私の論文「木版画をめぐる魯迅との交流史—和光小学校児童作品里帰りの今日的意義」が掲載された。

同3月、日本美術教育連合編集『日本美術教育研究論集 44』では版画教育と和光学園の現段階の版画指導に焦点をあてた私の論考が掲載された。

早速、中国関係では北京魯迅博物館、北京大学の先生方に紀要と論考集を送った。4月には和光学園編集『1934年和光小学生が魯迅に贈った木版画』画文集が上梓され学園から多くの関係者に送られた。

中国からの反響はメールや手紙で私のもとに届いた。

### 〈北京大学教授彭家声、張光珮よりのメール〉

先生がお書きになった『児童木版画と魯迅—75年前の作品を見る』を拝読し、その中から極めて多くを学び、かつ深い感動を覚えました。

東京の一私立小学校教師であった内山嘉吉（内山完造の弟）は1933年、1934年、当時、上海で創作活動をしていた魯迅に小学生の木版画を贈りました。論文で紹介されているのはそのことです。

2010年3月、江渡先生はわざわざ北京魯迅博物館を訪ねてこられました。魯迅博物館の地下に心を込めて収蔵されている日本の小学生の版画をご自身の目でご覧になり、非常に感激し、その場でそれらを複製し、日本に持ち帰られました。そして、当時の日本の小学生の版画を文章の中に絵を取り入れながら、生き生きと再現し、かつ、これを保存するために並々ならぬ努力によって、今回一冊の版画集にまとめ、今年3月、日本と中国の友人たちに紹介されたのです。

我々は江渡先生に深く敬意を表しますとともに、また先生が中国に来て取材されるための労をとってくださった中野光先生に対しても深く敬意を表さずにはられません。中野先生は現在健康状態がすぐれないと伺いますが、中日両国人民の友誼の発展に関しては、相変わらず、旺盛な関心を注がれていらっしゃると思います。

江渡先生がこのような大作を出版なさったことにより、中日両国人民の真摯で、深い友誼がさらに進み、両国間の末永い文化交流が益々発展し、アジアと世界の平和を創出する上で多大な貢献をされるものと確信します。（2011・6・21）

\*原文は日本語で、若干表現上の訂正を行った。

### 〈北京魯迅博物館黄喬生副館長の手紙〉

あなた様及びあなたの学校の責任者森下一期先生から貰った『日本美術教育研究論集 44』『和光大学表現学部紀要 11』『1934年魯迅に贈った和光小学生の版画』非常にありがとうございました。

あなた様とあなたの同僚たちの魯迅が収蔵した和光小学生の版画に対しての研究は非常に意味があることだと思います。あなた様の学校は現在も版画の伝統を発揚して、美術教育方面の成果も大きいと聞いています。

今年は魯迅が提案した現代版画80周年です。我々は一シリーズのイベントを開催予定です。あの広い視野を持ちながら適切に仕事をしていた偉大な教師を記念するためです。あなた様とあなたの学校の同僚たちの幸せを祈ります。 敬具（2011・6・8）

\*当時博物館館長は不在で、黄副館長が最高責任者。博物館は80周年の2011年に魯迅記念版画展を開催した（筆者註）。

### 〈北京大学商金林教授の手紙〉

お手紙と『日本美術教育研究論集 44』ありがとうございました。江渡先生の大署

を拝読できて私は非常にうれしいです。日中両国一衣帯水、両国の文化交流は歴史が長いです。古代の日本は中国から受けた影響が多いが、近代の中国は日本から受けた影響もまた多いのです。魯迅先生が若い頃、日本に留学し、彼の思想は日本で出来たんです。日本は魯迅の第二の故郷と同時に魯迅の精神の源でありました。魯迅は日本の文化が好き、日本人の物事への真剣さの一面を賞賛していた。魯迅が収蔵していた版画は彼が日本の版画が好きで、日本の子どもが好きで、日本の教育を敬慕していた何よりの証拠で、日中両国の国民友好と文化交流の証拠でした。あなた様が魯迅収蔵の版画を日本に紹介したことは、日本及び日中の文化交流研究上の功績と徳功が非常に大きいものです。1997年3月から1999年3月、私は東京大学教養学部にて2年講師をしていました。帰国した後「感覚日本」という本を出しました。中国の友人に日本のことを紹介しました。先生の大著及び論文を拝読して、私に日本で過ごした素晴らしい時間を思い出させました。日本の景色と愛すべき友人たちを懐かしく思いました。江渡先生の中国訪問を常に歓迎します。私は北京であなた様のことを歓迎いたします。(2011・7・8)

\*上記二つの和訳は、張中崢

2011年9月25日は魯迅生誕130周年であり、かつ上海での版画講習会を起点とした中国新興版画80周年となり、魯迅関連施設で様々な催しが行われた。

北京魯迅博物館では記念木刻展が開催されたという。9月に上海魯迅記念館、紹興魯迅記念館で国際研究シンポジウムが開催された。

この国際シンポジウムには、内山書店社長内山籬を通して、魯迅と小学生版画に関する報告を行うことを通告し、受け入れられた。魯迅記念館からの正式招待者として、私と和光中学校講師飯田哲、内山社長、社長ご子息とともに出席した。

上海魯迅記念館では様々なセレモニーが用意されていた。9月23日午前には魯迅生誕130周年記念上海大会が、各界を代表する人士500名ほどの参加者で行われた。午後からは国際シンポジウム第一日目。魯迅記念館講堂でこの日は7名の報告が行われた。私は「児童木版画と魯迅—75年前の作品を見る」と題し中国語訳プリントを配布。スクリーンに画像や文章が写されるかたちで行った。一人20分であった。

国際シンポジウムは翌日を含めて2日間、17名の各国からの報告が行われた。

魯迅と児童版画の関係について明らかになるのは初めてのことで、注目を集めた。ことに終了後、日本の参加者からの感想が寄せられ、会



日本小学生版画についての報告を行う

場で話の輪ができた。

他の発表では、多くを学んだが、ここでは主題に絞り、割愛する。

参加者に魯迅記念館編集の冊子が無料配布された。それが『上海魯迅研究 2011 年秋』であり、中に二つの特集が組まれていた。一つは魯迅生誕 130 周年、そして中国新興版画運動 80 周年だ。

版画運動特集に楽融論文「魯迅が収蔵し強く心引かれた児童版画」がある。最初の部分で過日、中国共産党成立 90 周年記念の上海少年挿絵秀作とシルクスクリーン展を開催したこと。それと関連して現在北京魯迅博物館に 43 点の日本の児童版画があること、その経緯について論述し、その一部を先に紹介した。注目したいことは次の最後の段落であった。

2010 年 3 月、和光学園、すなわち現在の和光大学の関係人員がそのために北京魯迅博物館に出向き往年の和光学園生徒の版画原作を見学し、かつこれらの作品を複製した。同時に、また 2010 年の和光中学校、和光鶴川小学校の生徒の版画作品を北京魯迅博物館に贈呈し、さらに中国側と一緒に版画展覧会を開催し、魯迅が収蔵した日本児童版画を「里帰り」させ、現在の和光中学、和光小学校の生徒の版画と一緒に日本で展示して、日中文化交流の新しいページを綴ろうと計画している。

この一文はわれわれの希望実現への力強い後押しとなった。

## 7. 日中子ども交流版画展の実現へ

2011 年 11 月、上海魯迅記念館館長王錫栄一行が関西方面を訪問する為に訪日。東京では内山社長に会って帰国。この予定にあわせて、和光学園代表行田稔彦と私の連名の手紙を内山社長に託した。

その内容の概要は次の点である。9 月の国際シンポジウムへのお礼。に続き、楽融副館長の論文に触れて、中国の児童版画を見たいこと。ぜひ和光学園児童との交流展覧会が開けないかという趣旨を記した。この 11 月 15 日付けの信書を内山社長は渡すとともに、北京魯迅博物館に収蔵している版画を併せて展示できないかを補足し、我々の希望を伝えてもらった。

2012 年は日中国交回復 40 周年であり、それを記念する催しが行われた。その、一つが東京にある中国文化センターでの「魯迅と日本の友人」展であった。この展覧会にあわせて上海魯迅記念館一行が訪日した。この機会をとらえて、和光学園関係者と記念館の方と会い、いまだ返事のない昨年の手紙への返事を求め、具体的提案をだすことにした。

5 月 16 日、中国文化センター見学後、和光学園の歓迎昼食会を行った。

出席の和光学園関係者は森下常務理事以下 5 名、中国側代表団王錫栄館長ら記念館職員

3名、上海人民対外友好協会常務理事ら2名、それと内山書店社長内山籬。

その場で和光学園理事長名の「日中子ども交流版画展」共催のお願い文書を中国側に提出した。

王錫榮館長はすでに、昨年の手紙への回答を用意していて、我々の提案と基本的に合致するものであった。

- ① 2013年に日中両国での交流子ども版画展の開催を行う。
- ② 時期は中国では夏休み時期に魯迅記念館で、日本では和光学園創立記念の11月10日の近くの日程とする。
- ③ 80年前の和光小学生木版画は北京魯迅博物館より、借り受けることでは合意している。何点になるかはさらに折衝する。
- ④ 性格は児童版画展ということで小学生を対象にする。日本、中国それぞれ40点づつ、北京の版画約40点、合計120点規模の展覧会となるだろう。
- ⑤ 双方に連絡責任者を置き、具体化をはかっていく。

この合意のあと、6月に入り日中両国間に国交回復40周年に水をさす対立問題が激化した。石原慎太郎都知事による、尖閣諸島購入の表明だ。さらに島を積極的に利用するための計画を進めるという。これは、国交回復時に双方が帰属問題の話し合いを避け、以降日本側は固有の領土ながら、中国側を刺激しないようにして来た問題だ。

さらに野田首相の政府は、尖閣諸島の国有化を行い、問題の沈静化をはかろうとしたが、かえって中国側の反発を買うこととなり、中国公船の海洋侵犯が常態化されていく。

中国国内では反日暴動にまで発展、両国国民の悪感情が高まっていった。

我々は国際緊張を高めて権力を集中しようとする、国家主義者の策謀にまたさらされてしまったのだ。あの82年前の柳条湖事件のように。

今回の事態をいま解明することはできないが、少なくとも我々の文化交流



上海三新学校児童作品

への努力はそれとは正反対に立っていると言えよう。平和の下でしか進められないことであり、更には平和をつくり出す事業であるから。

その後、2013年を迎えるまで、準備への動きが弛緩した。

連絡担当の行田稔彦は、2013年1月と6月に訪中し準備の促進をはかった。

学園内に小、中、高の美術教師を中心に展覧会実行委員会が発足した。作品の選択や送付などを進めていた。

6月下旬にようやく展覧会の概要がまとまった。

中国での開催は8月17日～8月25日となり会場は上海魯迅記念館。オープニングセレモニーは8月17日で、日本から和光小学校、和光鶴川小学校から児童4名と引率教員と関係者が参加する。

日本では10月12日～20日で、会場は東京四谷ランプ坂ギャラリーだ。オープニングセレモニーは13日（日）で中国からの参加は、上海三新学校児童1名と引率教員、上海記念館と北京魯迅博物館から13名の関係者の予定だ。

展示作品は80年前の小学生版画49点を中心に上海三新学校、和光両小学校からそれぞれ40点が展示されることになった。

## 8. 日中教育文化交流の今日的意義

2013年8月17日、著者は和光大学中国人留学生張中崢とともに上海魯迅記念館での「中日児童版画展」開会に出席した。

8月17日は82年前に魯迅と内山嘉吉による版画講習会が開かれた日だ。猛暑の中でよく魯迅先生の身がもったものだと伝えられるように、この日も東京では体験しない暑さであった。

記念館エントランスに設営された開会式会場には、和光小、和光鶴川小児童、上海三新学校児童8名と教員、壇上には中国関係者らが並び、開催を祝った。展示会場では中国児童のシルクスクリーン作品が色鮮やかに参観者を迎えた。

シルクスクリーンは子どもの絵をそのまま製版し、刷るということで、全ての過程を作者が行うというものとは違う。しかし原画に子どもの表現がみられ、生活から題材を得たのびやかさが感じられる。

和光児童の作品は川の生き物を題材にしているが、多摩川などの生活学習と繋がった総合的なもの。体験に基づいたこまやかな観察がひかっている。

80年前の和光小の版画は、静かに、しかし重厚な態度で存在している。参観者が丁寧に作品の一つひとつをたどりながら、時代に想いをはせていくもの。素朴だが真剣な彫り跡をたどれば、当時の子どもの息づかいが感じられる。

中国上海の地で、しかも80年前の児童版画を中心とした展覧会、時間と空間の壮大さは改めて感慨深いものがある。

この論考の締めくくりとして、今日の日中教育文化交流の意義について整理する。

- (1) 今日の日中関係は82年前の柳条湖事件当時と同じ厳しさにある。この事件は日本側の偽造によるものであることは今日の歴史的常識だ。しかし事件が民族感情の悪化を生み出し、終局にいたる日中15年戦争突入への契機となったものだ。

今日も出口の見えない紛争関係にあるように思われるが、両国市民の国際感覚と主権者意識は「国家主義者」の策動を許さないレベルを保っている、と考えたい。それだけの現実認識の成熟が両国市民にあり、教育文化の交流の進展は相互理解の促進につながるものである。

- (2) 魯迅によって中国で広げられた創作木版画は西洋で発達したものだが、日本にも先駆的に創作版画が取り入れられ、その日本から技法などを中国芸術家が学ぶことになった。さらに木版画そのものに関しては中国で創造され、明朝期に発展して日本の浮世絵版画の源流となったものである。このように相互の文化交流の一つの例として記憶にとどめるべきものである。

- (3) 中国革命期に発展した中国新興木版画は、1945年以降展覧会や画集で多くの日本人に知られ、その鮮明なテーマと直裁な表現性に多くの感動が広がった。日本の版画家に影響を与え、版画創作の活性化となり版画芸術の隆盛につながった。

- (4) 中国版画のリアリズムは戦後民主教育の思想とつながり、版画制作への刺激となった。1950年代、作文教育と共に、日本の児童版画はおおいに発展した。今日までにつながる美術教育の版画表現の分野として位置づいている。

1920～30年代の成城学園、和光学園で行われた木版画教育は、子ども主体の感性を大切に、版画の基本的な技法を無理なく指導した先駆的な取り組みとして今日でも多くのものを伝えている。また戦前に学校単位で行われた版画教育としてまとまった作品が存在したことは、貴重な教育的記録として残されるべきものである。

- (5) 今回の日中児童版画展覧会が両



和光小学生版画



80年前の和光小学校児童版画（井上伸一郎・5年）

国の関係者により実現できたこと自体の教育文化における価値について認識すべきだろう。また和光学園創立 80 周年として、創立時の児童作品展示と再確認は意義深いものである。

日中両国とっても、このような教育交流は子どもたちに善隣友好の精神を育てることになるだろう。それは日中両国の未来への確実な財産になることと信じる。

一 参考・引用文献

『魯迅と木刻』研文出版 1981 年

『魯迅全集』学習研究社 1984～1986 年

『ある私立学校の足跡—和光学園四〇年の教育』明治図書 1973 年

『和光学園 50 年』星林社 1983 年

『近代日本美術教育の研究』金子一夫著 中央公論美術出版 1999 年

『美術教育大系 4 版画』学芸書林 1968 年

『上海魯迅研究 2011 年秋』上海社会科学院出版社 2011 年